

25 中国地方の神楽と仏教～中世神話の世界～

【全2回】／開催方法：現地

なかのあいか
中野秋鹿

中村元記念館東洋思想
文化研究所研究員



受講料

一般料金：¥4,200 早割価格：¥3,200（納入期限：8月22日）

【日程・時間】【全2回】 8月28日(日) 13:30～15:00・15:20～16:50

■受講に必要なもの

【テキスト】レジュメ配布

天竺てんじくにある靈鷲山りょうじゆせんの一角が欠け落ち、遙か海を漂い出雲国まで流れ着いて、島根半島が誕生した。ゆえに島根半島は古来、「浮浪山ふろうざん」と呼ばれていた。この浮浪山を取り戻すため、海を越えて出雲国へと襲来する鬼の王。自ら弓を取り鬼の王を迎え討つのは、島根半島の西端に鎮座する日御碕神社ひのみさきの女神・十羅刹女じゅうらせつによであった。

出雲神楽でおなじみの演目「日御碕」の古い台本には、上記のような神仏習合的な世界観が描かれています。中世・近世において各地の宗教勢力は、日本古来の神話や伝承と仏教的世界観を融合させて、日本からインドや中国まで広がる、壮大な神話を創造していきました。それは中国地方の神楽にも大きな影響を与え、現存する近世期の神楽関係資料には、仏教的な世界観が色濃く反映されています。そして時代とともに形を変えながら、現在の神楽まで受け継がれています。

神、仏、鬼や死霊などが織りなす中世神話に彩られた神楽の世界を、一緒に読み解いてみませんか。